

EXHIBITION: 2000.12.11 (MON) ~ 2.23 (SAT) 11:30am~7:30pm 日曜休館

オープニングパーティー 12.11 (MON) 6:00pmより ディスカッション 12.15 (FRI) 22 (FRI) 7:00より ディスカッションはどなたでも参加できます。

ダイアログとしての小品展「起源イブ」は小品をグループ展示し、それを目の前に各作家同士が、お互いの作品を批評し合う、ディスカッションを主体とする企画であった。四回の軌跡を通じてキーワードとして挙げられたのは「イメージの呪縛」である。様々な先入観や自らの規制の域を出ない作品と批評は、他者を個々のイメージから教えず、共有できる造形言語や批評言語に達しない。これまでのディスカッションにおいては、個々のイメージに囚われた言語の空回りが支配的で、時に生まれる批評言語の響きが生かされ打ち消されてしまいがちだった。そこで私達はその共有された響きより適し、言語、身体、感覚、技術が交錯させる場としてコラボレーションを行う。そこは、作家の作品計画における生々しい発言やその具現化の瞬間を同時に立ち会う場である。責任のある制作物に互いのこだわりと技術をぶつけ合い、手を加えあう。作品の概念も拡大され、コミュニケーションの手法が増え、過程が意識・提示され、コミュニケーション・コラボレーションということ自体を問うことになる。興味ある作家に自分からコンセプトや表現方法・造形物を提示し、妥協による単純な調和や、「いい感じだろう」同士の足し算、逃避としての役割分担は拒絶する。少人数の対話と制作を行うことで、個々の自由な発想や可能性を倍加し、囚われているイメージを明らかにし、複数の視点と価値観を作品に培養する。自分のテーマの共有性を確かめ、広げ、発展させていく、集団と個、現代社会と個を言及していく意志を持つ。

近しい個を認め、他者の声に耳を澄まし、反発し合う。求めるものや意志を交錯させていく過程と結果は、確実にその成果を、自身に、他者に、あらゆるコラボレーションの集合体としての社会に還元していく。

橋本正太郎

ダイアログとしての小品展

起源イブ・第五夜

GALLERY SURGE

Collaboration Team

阿部尊美と鶴見朋之の場合

阿部尊美・Takami Abe

鶴見朋之・Tomoyuki Turumi

fruit sand

徳田智子・Tomoko Tokuda

水留周二・Syuji Mizutome

BAUM

石川和治・Kazuharu Ishikawa

橋本正太郎・Syoutarou Hashimoto

山口隆志・Takashi Yamaguchi

Y&F

藤岡久弓・Kiyomi Fujioka

吉田浩・Hiroshi Yoshida

第一夜

表現者同士、個々の準備をも確実にコントロールしているイメージの分析をめぐって連日のディスカッションであった。表現とは本来、半でに認知された世界観に過ぎず、よりかけような原理を目指して、自己の歴史とモチベーションを先鋭化し、更に知覚可能な形態へと変換する作業であるはずだ。

第二夜

個々の起源構造を言語表現でクリアにし、同時に小品を互いに批評するというフィードバックの場を通じ、多目的なイメージ・パフォーマンスを更に検討し集約する作業が行われた。しかし個々の「イメージ」の概念が互いに異なり、自己の歴史とモチベーションを先鋭化し、更に知覚可能な形態へと変換する作業であるはずだ。本誌を続ける意志と他者への問い直し不足の指摘によりディスカッション終了後批評文を提出し、発言への再確認を行った。

第三夜

他者の作品を自らの視点で語り、また作者からの反論・主張による個と他の構造、関係性に着目する意見を述べ、更にこの会話の中をたぐり回すキーワードが見え始める。そのキーワード自体がテーマとなり、議論が行われて議論が交わされた。また第二夜に引き続く批評文の提出により、「批評文のあり方」についての議論を交わした。その結果批評文により個々のアート観や歴史の考察、方向性について個々を構築するような共通言語を創造していくことが必要であるとされた。

第四夜

第三夜に引き続く他者の作品を自らの視点で語る作業からスタートした。しかしここでイメージによる発言が大半を占め、せっかく構築されたキーワードを議論の対話に引き継ぎられていくという現象が現れた。他者の発言が自分にならぬ入場とイメージに引き継ぎられていくことを批判的に認識するに至った。そのことにより多数の人との間でディスカッションの前に、少数のグループに分け対話をするが制作をしていくコラボレーション形式の構築が重要されるに至った。

Collaboration

